

# 雅楽だより

## 《目次》

- 江戸時代から続く名古屋東照宮の舞楽 1
- 現代語訳『楽家録』15 遠藤徹 10
- 笙の和音的解明 下 (3) 芝祐泰 6
- 情報欄 10
- 上牧の木村氏 高槻市長にヨシを説明 12

第54号  
発行

2018 (平成30) 年7月  
雅楽協議会

## 『江戸時代から続く 名古屋東照宮の舞楽』

### 名古屋東照宮の舞楽

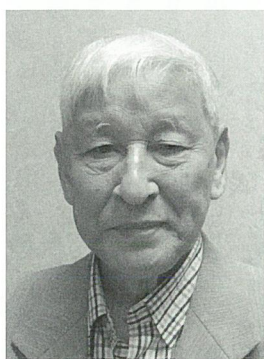
徳川家康をまつる名古屋東照宮は、江戸時代より舞楽が奏されて来た。

4月16日の祭典に向けての練習と祭典当日に名古屋東照宮(名古屋城の南約500m、オフィス街の一角)にお邪魔して、楽長の羽塚尚明氏(88歳)に練習の合間のお忙しい中時間を割いていただき、お話しをお伺いしました。

：名古屋東照宮の舞楽についていろいろと教えていただけませんか

「名古屋東照宮の舞楽は、江戸時代の創建当初から続けられてきています。現在は、私も東照宮舞楽部が舞楽の演奏を行っています。

明治になって東照宮の楽人は廃止させられてしまいましたが、明治14(1881)年に私の曾祖父で浄土真宗大谷派浄信寺住職であった羽塚秋楽が、徳川家の委嘱により東照宮の舞楽を続け130年余、現在に至っています。



羽塚尚明氏

す。」

#### 舞台は三間四方

：名古屋東照宮の舞楽の特徴はありますか  
「舞楽の特徴と云えば、4月16日に見ていたくとすぐわかると思いますが、この舞台は四間四方ではなく三間四方の舞台なので、少し狭いのです。4人で舞うとぶつかってしまいますので、平舞は4人ではなく2人で舞います。」

いつ頃から三間四方の舞台なんですかと聞かれるのですが、私が関わるようになった時はすでにこの舞台でしたので、古くから三間四方の舞台でした」

#### 装束は一幅 元服前の侍の子弟が舞っていたのでは

「また舞楽の装束ですが、昭和20(1945)年に名古屋も大空襲を受けましたが、幸いにも東照宮の装束は残りましたので、昔の装束を現在も使用しているものがあります。見ていただけると分かりますが、昔の装束は一幅もので、今の装束に比べますと小さいのです。ですから江戸時代は元服前の子どもが舞っていたのではないかと推測しています。舞楽面や装束は東照宮の所蔵の物を使用しています。ですので、ここで使用する陵王の面は、昔か



名古屋東照宮 4月16日 三間四方の舞台 舞楽 振鉾三節  
夕方5時から始まり8時頃まで続く 今年は振鉾 萬歳楽 延喜楽 打球楽 陪臚 陵王 落鐘 長慶子





延喜楽 左奥に演奏者の楽舎が組まれている

ら使用されていた面ですが、この面は面として作られたのではなくて、どうも壁掛けとして作られたのではないかと思っています。作りが壁掛けのようになってはいるのです。古いものですので、名古屋市中から市の重要文化財にこの話もありましたが、重要文化財となると自由に使用しない場合も出てきますので、文化財の登録は遠慮しました。」

…演奏者は左舞と右舞と別の方が演奏されるのですね

「当日のプログラムに配役を載せています。



舞台横に特設された楽舎

舞台の左奥、右舞側に楽屋を特設しましてそこで演奏します。演目ごとに演奏者が入れ替わるようにしています。」

…演奏者はどのような方々ですか

「演奏者のほとんどが僧侶です。ここでは名古屋東照宮雅楽部として演奏しますが、東本願寺名古屋楽部のメンバーでもあります。また僧侶でない方は中部日本雅楽連盟に所属しています。連盟は年一回の演奏会を開催しています。メンバーは、僧侶でない方も含まれますと総勢約60名です。

私は名古屋東照宮雅楽部部長で、また東本願寺名古屋楽部部長で、中部日本雅楽連盟の代表でもあります。

今年には振舞三節、萬歳楽、延喜楽、打球楽、陪臚、陵王、落躰、長慶子を三九名で演奏します」



名古屋東照宮で使用する陵王の面

名古屋東照宮の歴史

江戸時代から続く名古屋東照宮の舞楽はどのように興り、継承されて来たのか、羽塚尚明氏のお話しと資料などを基に振り返ってみたい。(以下、敬称は略させていただきます)

**名古屋東照宮の創建**

名古屋城は1609(慶長14)年に徳川家康の九男義直の居城として、築城された。徳川家康が1616(元和2)年に亡くなり、家康逝去の3年後の1619(元和5)年9月、城郭内三の丸に尾張徳川家初代義直によって家康を祀る東照宮が創建された。

**名古屋東照宮**

紅葉山より早く楽人を召抱える

東照宮の創建(1619年)より祭りは始められ、翌(1620)年にはお旅所を若宮八幡社の北に設け「神幸の儀」を行うなど祭りは年々盛んとなった。1630(寛永7)年には、京都から楽人を招いて道楽が奏された。

翌(1631)年には、名古屋東照宮に楽師を置いた。江戸城紅葉山に楽人を置いた1642(寛永19)年よりも10年余も早く、名古屋東照宮では楽人をおいている。

東照宮の祭礼は年を追うごとに大規模になり、神前での舞楽、神輿・山車などの行列が



東照宮の祭典での舞楽を間近に控えた練習。右端 全体を指導する羽塚尚明氏

あり、お旅所での舞楽もあり、盛大に行われていた。尾張徳川家は延宝年間(1673~80)までに13人の楽人を召抱えたという。

**徳川家より委嘱され**

**羽塚秋楽 東照宮舞楽を継続**

明治になり廃藩と廃仏毀釈の影響で東照宮の楽人も廃止され、明治9年に東照宮も名古屋城内から現在の地へと移された。明治14年に徳川家が羽塚秋楽に東照宮舞楽を委嘱し、東照宮の舞楽が続けられた。

徳川家から東照宮舞楽を委嘱された羽塚秋楽は、門人を率いて東照宮楽事に臨んだ。まさに途絶えてしまうかと思われた名古屋東照宮の舞楽を続けたのが、今回お話しをお伺いした羽塚尚明氏の曾祖父にあたる羽塚秋楽であった。



羽塚秋楽(1813(文化10)年)

1887(明治20)年

雅楽の大家と呼ばれた

東照宮の舞楽を徳川家より委嘱された羽塚

秋楽は、1813(文化10)年、浄土真宗大

谷派浄信寺の二男に生まれた。幼時から音楽

をたしなみ、16歳の1829(文政12)年か

ら笛を大神基亨に、25歳、1838(天保9)

年から箏を安部季良に、33歳、1846(弘

化3)年からは笙を豊原陽秋等宮内省楽師に

学んでいる。そしてしばしば京都に出て二

条家、今川家等を歴訪してその奥義を習得。

更に東儀文均に多年師事し、神楽、催馬楽、

朗詠などのうたいものから、詩歌管絃の秘曲

の伝授を受け、その演奏はすぐれたものとし

て諸国にその名声をとどろかせていたとい

う。羽塚秋楽の門下は数百人と称せられ、尾

張藩士に大道寺主水志水忠平、間宮六郎、生

駒周行等、東照宮楽人に岡本鍵太郎、恒川弥

太郎、佐藤弥平次等その他一般人も多く、吉

沢検校もその一人であったという。

1869(明治2)年、56歳の時に長子慈

音に浄信寺住職を譲り、その後は自由人とし

て楽道に専念。楽器の製作にも非凡の才を示

し、多くの楽器を製作し、門人に授けたとい

われる。

ちなみに、羽塚秋楽が東照宮の舞楽を委嘱

されたのは69歳の時である。

秋楽の古希の賀宴は遠近数百余人の門人が

会し、終日管絃を演じた稀有な集会であった

と伝えられている。

秋楽は、東本願寺声明にも通じ、本願寺か

ら召されて東本願寺の雅楽の指導も行った。

秋楽は、1887(明治20)年に74歳で亡く

なられている。(注1)

秋楽の実弟 黒田慈住

東本願寺楽頭へ

この羽塚秋楽には黒田慈住という弟がお

り、兄弟で雅楽の造詣も深く演奏技量も高か

ったという。東本願寺の雅楽は、この秋楽の

実弟で安浄寺の黒田慈住が、東本願寺の初代

の楽頭となっている。その後東本願寺の楽頭

は、秋楽の長男羽塚慈音、次男羽塚慈田、慈

田の次男羽塚啓明、三男羽塚堅子と続き、現

在は今回の取材でお話しをお聞きした羽塚啓

明の子息である羽塚尚明へと続いていく。

秋楽の孫 羽塚啓明

1880(明治13)年、

1945(昭和20)年

『日本楽道叢書』を發行

秋楽の次男で守綱寺の住職である羽塚慈田

の次男で、秋楽の孫として1880(明治

13)年に生まれたのが、後に『楽家録』『續

教訓抄』を校訂し、解題・解説を書いて出版

するなど、雅楽の発展に大変貢献した羽塚啓

明である。羽塚啓明も秋楽と同様幼少のころ

から雅楽を学び、14歳の時には『楽家録』の

書写を始めたという。そして管絃、舞楽に精

通し、その資料、楽器、装束、面などの収集

も行い雅楽の研究も行った。羽塚啓明は、昭

和の始め『日本楽道叢書』を發行すべく、宮

内省前楽長上眞行と日本文学の大家である文

学博士高野辰之の二人を顧問に迎え、編纂主

任に羽塚啓明本人があたった。

『日本楽道叢書』刊行の趣旨について次の

様に述べている。「雅楽は素晴らしいが、そ

の書籍などはなかなか読むことが出来ない。

多くの人がこの素晴らしい雅楽の精神に接す

ることが出来るように、苦勞して集めた書籍

の中から精選して刊行する(簡単に一部を

要約)というもの。(注2)

第一回発行は、1928(昭和3)年11月、

最終巻12冊目の発行は1932(昭和7)年

5月、5年がかりだった。半紙本、和紙、和

綴、12冊の刊行を行っている。(注3)

雅楽普及会『雅楽』に

論文を多数掲載

又この頃、羽塚啓明は1930(昭和5)

年から3年間余り雅楽普及会(代表東儀民四

郎)が月間で発行していた『雅楽』に毎回の

ように雅楽の研究論文を掲載している。

雅楽普及会は、1930(昭和5)年2月、

宮内省の楽人東儀民四郎によって「雅楽の普

及」の為に結成され、講習部では管や舞の講

習を、演奏部では毎月のように演奏会を開催

した。

そして同年1930年10月から雑誌『雅楽』

も毎月発行された。毎月の発行だが、途中休

刊もあり、昭和7年7月号まで約3年間で通

算17回発行され終刊となった。(注4)

この『雅楽』には羽塚啓明の他、実兄であ

る三條商太郎、実弟羽塚堅子も多くの論文を

掲載している。『雅楽』1932(昭和7)

年6月号には長兄の三條商太郎は「呂旋と律

旋の話」、羽塚啓明は「還城楽物語の梗概」、

弟の羽塚堅子は「由に就いて」の題名で兄弟

3人が揃って原稿を掲載している。

又、雅楽普及会の演奏会には、羽塚啓明は

1931年10月の公演に出演し、実兄の三條

商太郎は東京に住んでいたこともあり19

30(昭和5)年12月、1931(昭和6)

年1月、2月、3月、4月、10月、11月、12

月、1932(昭和7)年1月、3月、4月、

5月、6月、と出演している。雅楽普及会の

演奏会は管絃の演奏が主で、舞楽は胡蝶を1

回公演するのみである。(注5)

NHKラジオ開局

愛宕山で 雅楽を演奏

1925(大正14)年、愛宕山でのラジオ

放送の開始の時に名古屋から呼ばれ、雅楽の

音が第一号の電波に乗って放送されたとい

う。羽塚啓明が1928(昭和3)年には『日

本楽道叢書』を發行するなどもあり名古屋の

方々の演奏の実力は東京にも知られていた。

(注6)

日本橋三越 建物完成で舞楽

1935(昭和10)年、三越本館の完成時

には、名古屋の方々が東京に向いて屋上に

て舞楽を演奏したという。次ページ写真参照

(注7)



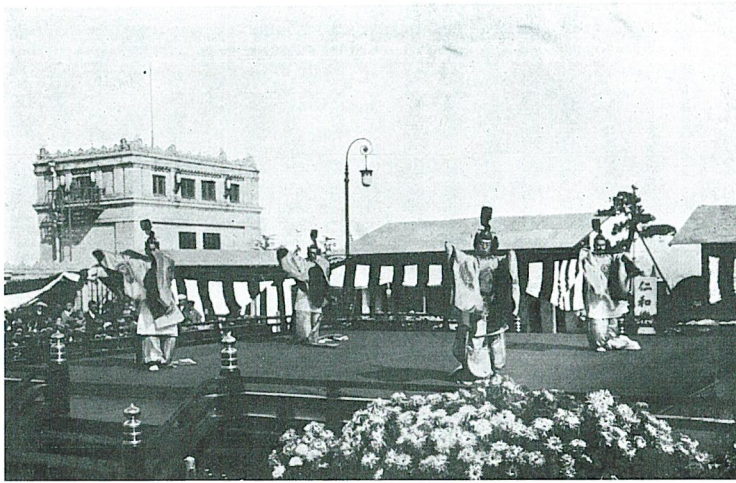
雅楽普及会発行の「雅楽」  
羽塚兄弟3人の原稿を掲載





箏を弾く羽塚啓明(右) 箏を吹く三條商太郎(左)

撮影年月日 場所不明 (c) 文藝春秋



1935 (昭和10) 年日本橋三越屋上での  
名古屋の方々による舞楽 仁和楽

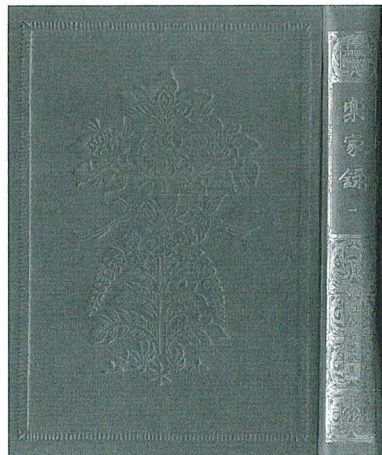
楽家録 解題

昭和十一年五月二十二日

羽塚啓明

五

『楽家録』羽塚啓明  
解題より



1935 (昭和10) 年3月発行  
の『楽家録』表紙

『楽家録』『續教訓抄』を  
校訂した 羽塚啓明

『楽家録』は、雅楽の百科事典とも呼ばれ『教訓抄』『體源抄』とともに三大楽書の一つである。江戸時代安倍季尚あべすえひさによつて1690(元禄3)年に書かれた。その『楽家録』50巻をいろいろな写本を突き合わせて校訂したのでこの羽塚啓明である。

1935(昭和10)年3月に第1巻を発行し翌1936(昭和11)年6月までに全5巻を発行した。

羽塚啓明は『楽家録』の解題の最後に「私が『楽家録』の書写を思い立って書きはじめ

たのは14歳の時明治27年でした。全50巻を書きすのに2年かかりました。その後『楽家録』に引用されている本や参考書を調べては書き留めておきました。『楽家録』の刊行の校訂のお話しを受けてこれまで調べてきたことなどが役に立つよううれしく思う。(要約し現代文に書き直した)と記している。それまでは写本しかなかったため、読みたいと思つても手に取つては読めなかった。これ等の刊行により『楽家録』『續教訓抄』が多くの人の手にとれるようになったことは、雅楽の発展にとつて大きな功績である。(注8)

東洋音楽学会でも  
活発に研究をすすめる 羽塚啓明

1936(昭和11)年には、雅楽など東洋音楽を研究する東洋音楽学会が、田辺尚雄たなべひさお、岸辺茂雄きしべしげお、滝邊一たきべい、林謙三はやしけんざうによつて結成され、直後に羽塚啓明、平出久雄ひらいでひさおも加わり活発な研究活動が行われた。(注9)

なお、羽塚啓明については『日本音楽大事典』(平凡社刊P719)では次のように紹介されている。「日本雅楽の研究家。名古屋の真宗大谷派寺院守綱寺住職。父祖の代より雅楽を愛好。管絃舞楽に精通し、その資料、楽器、装束、面などの収集所蔵は学界随一といわれたが、惜しくも第二次世界大戦で焼失した。『日本古典全集』の『楽家録』及び『続教訓抄』の校訂・解題を担当したほか、重要な楽書詠を「日本楽道叢書」として編纂し、とくに『楽家録』については『楽書要録解説』『校異楽書要録』を発表するなど文献の紹介に大きな貢献をなした。そのほか「近衛家蔵五絃譜管見」など多数の論文を雑誌に発表した。なお、

「日本上古音楽史」を著した雅楽研究家の三條商太郎および声明研究家の羽塚堅子はその兄弟である。」と。

羽塚啓明の弟  
羽塚堅子

(1893(明治26)年～  
1975(昭和50)年)

羽塚啓明の弟の羽塚堅子もまた、幼い頃から雅楽を聞いたり見たりして育つた。幼少の頃には横笛を宮内省の楽師山井基萬やまのもとむねに、笙を辻英吉つじひできに、雅楽普及会を主宰していた東儀民四郎とうぎたみしろうから箏や舞も習つた。羽塚堅子の長男は東儀和太郎とうぎわかつたろうから箏を習つたという。

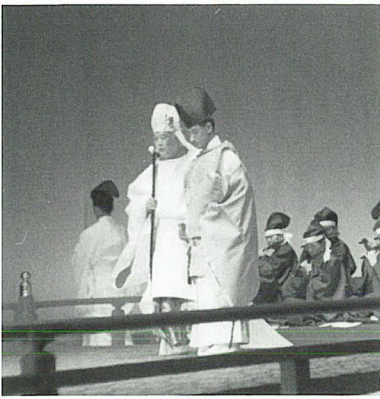


羽塚堅子

採桑老を復興

羽塚堅子は、1961（昭和36）年「舞うと死ぬ」とも言われている採桑老を復活させ京都の東本願寺で親鸞聖人700回の大遠忌で舞われている。羽塚堅子は、採桑老について「採桑老は天王寺に伝わっているが近年絶えている。之を残念に思っ、旧譜を集め私なりに復活したものが、今回舞う曲である。古記録を見ると、種々の事が書いてあるが、厳重な儀式がある。能楽の翁の曲は恐らく、この採桑老の儀式を取り入れたものと思われる。面を着ける作法など非常に酷似していると思う。」（注10）と書き残している。

その後も1968（昭和43）年に東本願寺名古屋別院で採桑老を舞われ、1969（昭和44）年11月25日国立劇場小劇場での日本雅楽会第8回公演で舞われている。この国立劇場での公演では、係者（採桑老の舞の独特のもので、舞人を舞台まで連れていく係りの人）は羽塚尚明であった。（注11）



採桑老を舞う羽塚堅子、係者は羽塚尚明 1969年11月25日国立劇場

陵王

荒序も復活

羽塚堅子は、採桑老の他に陵王の荒序も1961（昭和36）年に再興し東本願寺の親鸞聖人700回の大遠忌で舞っている。東京でも日本雅楽会第10回公演（1971（昭和46）年10月15日国立劇場）で舞っている。

羽塚堅子は荒序について「荒序の荒の字は敗の訓、すなわち敵をやぶる義である。唄序について荒序があり、この荒序は完全に敵をやぶる状態を模したので、その舞い振りは乱序や唄序の比ではない。頗る活発なもので、俗に言う眼にもとまらぬ早き舞である。（中略）

この荒序の太鼓は、初から打ち出し、帖の終りの太鼓まで十六打つという。この震動拍子は「蘇莫者」の序と荒序のみであると聞いている。これを八帖するから震動拍子が八返ある訳である。この震動拍子には「鉦鼓も鉦鼓も入るので、とても面白いものである。（下略）」と記している。なおこの時の大太鼓は羽塚尚明が打っている。（注12）



採桑老を舞った羽塚堅子氏（左）と係者の羽塚尚明氏（右）1996年11月25日国立劇場楽屋

羽塚堅子は声明の研究でも知られている。中部日本雅楽連盟の結成から78年

今年68回定期公演

1940（昭和15）年に羽塚啓明、羽塚堅子らによって中部日本雅楽連盟が結成されている。この名前が付けられたのは、中部日本新聞社が後援だったからとのことである。この時啓明60歳、堅子は47歳である。結成の時に演奏会などが開催されたと思われるが、残念ながら資料が見つからない。結成の年は、多忠朝により浦安の舞の創作された年でもある。

中部日本雅楽連盟は、戦後になってから定期演奏会を開始する。第1回は1950年でそれ以後毎年開催し今年第68回演奏会を10月10日（水）名古屋芸術創造センターで開催する。（注13）

取材を終えて

現在の楽長である羽塚尚明氏にいろいろとお話しを伺い、また資料などを調べると、名



陵王 荒序を舞う羽塚堅子氏 大太鼓を打つのは羽塚尚明氏 1971年10月15日国立劇場

古屋の雅楽は、演奏でも研究でもとても活発に行われていることを知り、また多くのことを学ぶことが出来ました。

今回も多くの方々にお世話になりました。

（注1）旧版『名古屋市史』

（注2）『日本楽道叢書』上P60

（注3）1988（昭和63）年に復刻版が

上巻・下巻で臨川書店から刊行された。

（注4）『雅楽の近代と現代』寺内直子著を

参照した。

ちなみに雅楽の研究論文や演奏会情報などが発行されたのはこの時が初めてで、雅楽普及会の『雅楽』は3年余り発行された。

同時期に雅楽同志協会（近衛直麿主宰）

1930（昭和5）年も結成され毎月の演奏会も開催し、また『雅楽同志協会月報』を発行した。この『月報』は2年余りで13回発行した。

その後雅楽の情報紙は小野雅楽会から戦後に月1回発行されていた「会報」を、

1950（昭和25）年4月の第16号から『雅楽界』と名前を変えて発行された。当初はガリ版刷りで、1994（平成6）年5月の60号まで発行されている。

日本雅楽会で1967（昭和42）年2月より発行していたのが「日本雅楽会会報」で、

発行者である日本雅楽会会長押田良久の高齢により1998（平成10）年11月の171号で終刊となった。

その後雅楽協議会の「雅楽だより」が

2005（平成17）年4月より発行された。



(注5) 『雅楽の近代と現代』 寺内直子著を参照した

(注6) 「雅楽だより」27号

(注7) 「雅楽だより」27号

(注8) 『楽家録』は1977(昭和52)年に現代思潮社より複製され、現在はパソコンで国立国会図書館デジタルコレクションから全文を読むことが出来る。「雅楽だより」紙上で連載している「現代語訳楽家録監修遠藤徹」は、羽塚啓明の校訂によるものである。

(注9) 『日本古典音楽文献解題』講談社(P447研究の手引き 雅楽 福島和夫)を参照した

(注10) 「日本雅楽会会報17号」1969(昭和44)年

(注11) 採桑老の復元は、羽塚堅子の他、1969(昭和44)年10月29日国立劇場主催「聖霊会舞楽法要」で雅亮会の跡見昌雄が古譜より復活させ公演している。また、2007年6月に国立劇場主催の「雅楽『楽家』の伝承を求めて」で東儀俊美元宮内庁楽部首席楽長の復舞により東儀俊美本人が舞っている。2007年10月には雅楽翠篁会の演奏会で、2010年6月には雅楽道友会の演奏会で東儀俊美が舞っている。

(注12) 日本雅楽会第10回演奏会プログラム1971年10月15日。なお、順序・荒序は、芝祐靖が2006年から2009年にかけて復曲し、2009年6月13日国立劇場で公演している

(注13) 「日本雅楽会会報」141号  
1990年4月1日号

### 笙の和音的解明 下

藝術院 芝祐靖

下(3)

「比」の和声 律和音系統の合成  
「比」の竹は神仙音(C)で、笙の変羽に当る律である。この和声は其の名とする「比」音を密集和声の中間に持つており、「比」音を根音として構成されたものでない事は明らかである。

「比」和声の本体は前出「行」の和声で、之に「比」の律を附加して合成されたものである。(譜面1)

「美」の和声 律和音系統の合成  
「美」の竹は鼻鐘音(g#)で笙の呂角に当り、和声としては「美、乙、行、美、下」などと補助に用いられる合成和声である。

その本体は甲乙の宮音(根音)と省略した「乙」の和声で、之に「美」(鼻鐘音(g#))音上呂和音の変型を求めて其の根音(美)と内声(比)を附加したものである。

変型和音に就いては、主要和声「一」の項で律の変型和音の活用が見られた。呂和音の変型は内声の長二度(順三律)上昇である。(譜面2)

譜面2の「美」音上の変型和音は、その外声(五度)を笙保持音中に得られぬので之を省略して、根音と内声を用いたものである。右の如く「美」和声は、その本体を律和音系統の「乙」和声の省略型とし、それに「美」

音上呂和音変型の根音と内声を附加した呂律混合の合成和声である。

「下」の和声 律和音系統の合成  
「下」の管は下無音(f#)で平調宮笙の商に当る律である。「下」和声は「下、下、乙」などと経過和声として用いられる外、盤渉調曲の「徴和声」としても活躍する補助和声中の重要なものである。

「下」和声は密集型和声で其の本体は甲乙

の宮音(E)を省略した「乙」の和声である。之に外声(五度)を省略した「下」音上呂和音の根音と内声を附加結合したものである。

「下」音上の呂和音は、笙運指上演奏不能の和音で、其の為に呂和音の象徴である根音と内声を活かし、その外声(五度)「言」(c#)を省略して用いたものである。尚「下」和声も律和音系統の本体に呂和音省略型を附加した呂律混合和声である。(譜面3)

(譜面1)

(譜面2)



(譜面3)

和声の合成譜

(譜面4)

「言・美」の合成譜

(譜面5)

特殊和声の構成譜

次ニ八ヲ以(テ)行ヲ調ブ甲乙 行ヲ以(テ)乞ヲ調ブ同音 又行ヲ以(テ)九ヲ調ブ甲乙 九ヲ以(テ)上ヲ調ブ同音 (但秘蔵口伝云九ヨリ猶今微少調也) 上ヲ以(テ)十ヲ調ブ甲乙 十ヲ以(テ)比ヲ調ブ 次ニ美ヲ以(テ)毛ヲ調ブ 毛ヲ以(テ)斗ヲ調ブ甲乙 斗ヲ以(テ)トヲ調ブ甲乙 トヲ以(テ)比ヲ調ブ甲乙

(前略) 次ニ二ノヲモテ乙ノ竹ニ合ス横笛千ノ穴ノ音也 乙ト凶ト同音、乙ヲ以七ヲ調ブ甲乙 又乙ヲ以(テ)八ヲ調ブ同音 七ヲ以(テ)一ヲ調ブ同音 一ヲ以(テ)下ヲ調ブ甲乙 下ヲ以(テ)言ヲ調ブ甲乙 (下) 言ヲ以(テ)千ヲ調ブ甲乙 (同音也) 又言ヲ以(テ)工ヲ調ブ同音 工ヲ以(テ)美ヲ調ブ

笙調簧の和音的解明  
 伯朝葛撰 続教訓抄 管十笙之部  
 文永第七歳 一  
 調作法

以上「十、工、行、比、美、下」の六補助和声はその和声名の律(音)を以て構成されたものではなく、「乙」と「凡」の二主要和声を基として、その省略体や省略体に所要の音律を附加して合成されたものである。

調子(品玄、入調)の特殊和声

古くは品玄、入調などと呼ばれ、秘曲としてその傳を重んじた笙の曲、「調子」には多様な特殊和声がある。

「調子」は笙の幽玄な音楽として其の指法を駆使したもので、之もその本体とする主要和声に所要の音律を添えたり、或は運指上の技法によつて所要の二声、三声などの和声に構成したものである。

これ等の中で、「言」、「美」と譜字を為してゐるものは、「乙」和声中の一指を省略して「言」或は「美」の管声を添えたもの、「美」は「凡」和声の一指を省略して「美」音を添

えた合成和声である。(譜面4)

特殊和声の構成

又贅留した音律に主要和声を可能な範囲で載せて構成されるものもある。(譜面5)

この(譜面5)例の他に大よそ次(譜面6)の諸和声、復音が用いられる。

これらはいずれも雅楽呂、律兩種和音の結合、合成或はその省略型である。之らの和声、復音には多種多様な運用があり、因つて品玄、入調曲の妙を成している。

(譜面6)

品玄・入調に現はれる和声と復音

とある。之は十九管笙の調律次第で、現代の十七管笙では終末の毛、斗、トを除いた「十ヲ以(テ)比ヲ調ブ」にて畢るものである。

この説に見える「甲乙」と宮徴の關係、即ち完全五度或はその転回である完全四度を示し「同音」とあるものが今言うところの甲乙(オクターブ)を示したものである。

この調作法を譜にすると(譜面7)の如くである。



(譜面7)

伯朝葛撰 續教訓抄の調作法の譜

伯朝葛撰 續教訓抄の調作法の譜

乙 七 八 一 下 言 千 工 美 八 行

乙 九 上 十 比 美 毛 斗 (斗) ト 比

同抄 又説 笙ヲ調ル次第

乙カシラトシテ先四ニ合ス サテ七ヲ調  
 次ニ八ヲ調 乙ニ七ハヲ能ク調ベフセテ  
 次ニ七ヲ以テ一ヲ調、其ノ一二下ヲ合ス サ  
 テサイソノ八ヲ以テ行ヲ調、其行ヲ以テエヲ  
 調、ソノエヲヨクヨク調ベツレバ サイソノ  
 乙ニアフナリ。扱次ニ行ヲ以テ九ヲ調、次ニ  
 上九ニ合 次ニ十ニ合、次ニ千ヲ合、件ノ  
 下ニ言ヲ合、エヲ言ニ合、エヲ以テ美ヲ調、

次ニウシロノ比ナラバ七ト言トノアヒダノ音  
 ニ調ル也。

と記されてある。前記と大同小異で十七管  
 の調律次第である。但し最後の「比」の調法  
 が「七ト言トノ間」とあつて其のより所のな  
 い記であるが、音律の協和を用いて整調する  
 法を説いたものである。(譜面8)

是等の両記は、笙家豊原統秋撰の「體源  
 鈔」四笙之部に、其儘記載されて居り、別に  
 統秋考案と推定される笙調次第がある。

豊原統秋撰の「體源鈔」四笙之部(永正九  
 年)

笙 調次第

以四合乙八 同音笛下 以乙為甲調一七  
 乙笛中 以七為甲調下千 乙笛五 以下為甲  
 調工言 乙笛丁 以工為甲調美乙 已上甲乙  
 甲乙調次第了(完全五度或は下方完全四度の  
 意) 以乙為乙調之行 甲笛夕 以行為乙調  
 上九 甲笛六 以上為乙調十也 甲笛上  
 以十為乙調比 甲笛丁 已上乙甲乙甲調次第  
 (一)(完全四度或は下方完全五度の意)

此の記の内、「為甲」とは「宮」(根音の意)  
 として「調○○乙」と「徵」(完全五度 或  
 は下方完全四度)に調べると表し、「乙」は「徵」  
 に当る意である。又「為乙」とはある音を徵  
 に見たてて「調○○甲」とある音を「宮」の  
 位(完全四度或は下方完全五度)に調べると  
 表している。之を譜にすると次の如くである。

(譜面9)

この調べ次第では、甲乙の律(音)は同時

(譜面8)

伯朝葛撰 又説「笙ヲ調ル次第」の譜

伯朝葛撰 又説「笙ヲ調ル次第」の譜

乙 七 (七) 一 下 行 乙 九 上 十 千 言 工 美 毫 ← 比

に調べて行く法が示されている。  
 次に笙家安倍季尚撰の「樂家録」には  
 樂家録十 鳳笙 第廿二

調之法

先定乙管声 正平調  
 以乙調七 正盤涉  
 以七調八 上平調 復可合試於乙声  
 以八調行 正黄鐘 復合於乙声  
 以七調一 下盤涉 復合於乙声

(譜面9)

豊原統秋撰 「笙調次第」の譜

豊原統秋撰 「笙調次第」の譜

ハ 乙 七 一 下 行 乙 九 上 十 千 言 工 美 乙 行 乙 九 上 十 比

以一調下 正下無 復合於七声  
 以行調乙 下黄鐘 復合於乙声  
 以乙調九 正毫越 復合於行声  
 以九調上 上毫越 復合於行声  
 以上調十 正双調 復合於九声  
 以下調千 上下無 復合於一声  
 以下調工 下上無 復合於千声  
 以工調言 正上無 復合於下声  
 以十調比 上神仙 已上

右記の中、小字の上毫越は高音毫越(d)、  
 正平調は正声の平調(e)、下上無は低音の  
 上無(c#)と上、正、下と音位を表したも  
 のである。(譜面10)

之は「續教訓抄」の「又説、笙ヲ調ル次第」  
 に似て居り完全五度、四度の協和を取り入れ  
 た調笙の次第である。

更に太秦昌名撰「新撰樂道類集大全」巻九  
 笙部には「續教訓抄」の二調法も載せ、他に

新撰樂道類集 所載

笙調法

先以四合乙同音 以乙調七甲乙  
 以七調一 同音以一調下甲乙以下調千同音  
 以千調言甲乙以下調工甲乙以工調美甲乙  
 以乙調八同音以乙調行甲乙以行調乙同音  
 以行調九甲乙以行調上甲乙以上調十甲乙  
 以十調比甲乙以乙調乙甲乙以乙調九甲乙



(譜面10) 安倍季尚撰 「楽家録」 「調之法」 の譜

(譜面11) 太秦姓岡昌名撰 楽道類集 笙調法の譜第段

同 第二段

同 第三段

以凡調上同音以乙調一甲乙以八調行甲乙以七調千甲乙以千調言甲乙以言調工同音以十調也同音以也調比甲乙以美調毛甲乙以毛調斗甲乙以斗調ト甲乙以八調七甲乙以下調比甲乙

とあるのは、十九簧笙の調律次第でその協和を甲乙(五度)乙甲(四度)同音(一八音)で調整する姿を記したものである。その

附記に 自太至細注之次第  
乞一工凡毛乙ト下十美  
行斗七比言上八千也

この笙調法は三段に分けられ、第一段は十七管笙(十五律)の調簧順序、第二段は甲

乙同音協和の調べ方、第三段は十九簧笙に必要な諸律の調律連繋を示したものである。以上各楽書に載せられた笙調律法は、順八律(完全五度)、順六律(完全四度)、逆六律(下方完全四度)、逆八律(下方完全五度)、一八音の音程を以って笙調律を行う記である。

調笙の実際と呂律の和音

笙調律の第一段階としては、古来の楽書に載せられた「甲乙」「同音」の順を追って大凡の律を得る事は、近世も同じである。

甲乙法を併せて調笙を始めるのである。譜面12の次第によって凡その律を各管に調べ、以下行う調律の根底とするのである。

楽律の調整(循環無端)

完全五度関係(順八逆六の法)を十二回追うと根音の半律(甲音)とはならず、微かに高い「変律」となる音律算定は理論上の事実であるが、実際に回転する音楽の音としては不適當なものである。

古代支那楽用の笙は、保有する音律の多寡によらず十二律を缺くことなく備へているので、完全五度関係を追って其の根音より一八音に至る調律を進められるものであるが、此隙に生ずる変律(微かに高い十二番目の音)は音楽上に使用できぬものであり、又十二律相互間の協和も得られぬので「循環無端」即ち微かに高い変律を生ぜしめない、完全一八音になる調律法が用いられたのである。

斯く完全五度或はその転回の完全四度を追って行くと、その度ごとに律度が廣くなつて行くのである。精密な五度であればある程、各音律度は廣がり行き各律五度関係の律は完全に協和するが他の律変(音程)に当る音律間は、絶対に協和せぬ音律が調律されるのである。

即ち或る音(本元は壹越音(D))を根音として、順八と逆六律(一八音内の完全五度関係)十二回行くと、根音の甲音なるべき音に至るが、是が根音の完全な甲音より微かに高い音、所謂「変律」が生じる(音律算定の原理に現れる)のである。

然し笙調律の第一段階としては、大凡の各律を得る為に「順八逆六」及び「順六逆八」の法、

この循環無端という調律法は、変律を生ぜしめない様に各完全五度(其の転回下方完全四度)を微かに縮めたもので、根音より其の一八音までに變律の上昇分を各律平均に分けて下降せしめたものである。即ちピアノ、オルガンの調律に行われている「十二平均率調律」に等しいのである。斯くして古代雅楽笙もピアノ、オルガンも、音楽に適した音律即ち「楽律」と成っているのである。

日本雅楽笙は十五個の音律を持つているが、甲乙関係を除くと九個の音律である。即ち三個の音律分だけ純正度の高い音律が調律



(譜面12)

### 調望次第 第一段

甲 乙 順八 逆八 法

乙 順六 逆八 法

笙の調律手段としての呂律和音

されており、如何なる音律間に於いても快よき協和を為すよう精密に調整されているので、ここに之を「協和律」と言い事にしては、循環無端（十二平均律）と言ひ雅楽の協和律と言ひ共に冷厳な音律算定上の不解決を、温和な楽律に解決したもので、調律者の耳（音感）にて処理し完成される精緻な律である。

五度四度甲乙を追って大凡の律を調べ次にこれ等の整調に入る。この時「雅楽根本和音」とは意識せず調律者は伝承によって、呂律両和音を整調の手段として極めて自然的に用いている。（譜面13）

「イ」は「行」を呂（根音）として「ハ」を調べ、「ハ」より「七」を調べ、「行」と「七」の協和を調べ、「ハ」を加え「ハ、七、行」即ち呂和音の響（協和）を調べる。

「ロ」は「宮」より「徵」を調べ、「乙」より「行」を調べ、「七、行」の協和を調べ、「乙」を加えて「七、行、乙」即ち律和音の響（協和）を調べる。

これらの手段は、笙和声の構成単位として自然的に調律者が用ひ伝えたもので、必ずしも前項に説いた「雅楽の呂、律和音」と意識したものではなく、笙相竹（和声）の一部を吹奏して精密調整の手段として来たものである。

如斯調笙上の慣用手段となっている呂、律和音と甲乙音の連繫を追うと次の如き次第で笙調律は完成するのである。尚便宜上律和音系統と呂和音系統に分けて述べるが、実際にはこの両和音系統の響を可能な限り併用して精密調整を進めるのである。（つづく）

（小野雅楽会発行「雅楽界」47号19962（昭和37）年6月10日発行より許可を得て転載。一部旧仮名遣いを新版仮名遣いに、旧字を新字に、五線譜に新たに番号を付け、その位置は随時移動した。）

(譜面13)

### 整調手段としての呂律和音

黄鐘（調の曲）の中で「桃李花」の曲の終わりは平調で止めるがこれは曲の終わりが断絶して、半ばでこれを止めるからである。よって吹止においては、黄鐘を用いるのである。

#### 第四十六 舞樂のときの吹止の説

平調、太食調の曲で、舞樂のときの吹止は以下のように吹く、五上引夕上。五上五千一上引上。上。上。上。上。

このように（右）笛の旋律、左は箏の旋律）笙は別に細かなことはない。

#### 第四十七 大曲吹の説

季音記に曰く「大曲吹というのは、おおよそは的々拍子に有るといふがつまるところは、そのようなものではない。惟「ただ」楽曲の貌（すがた）により、この名があるのである。総じて於世吹のようにこれを奏する。例えば竹を裂くように少しも停滞することがないようにすべきである「春鶯囀」の樂位は大曲吹である。他の曲はこれに準じて、知ることが出来る。云々

#### 夏～秋までの主な雅楽演奏会など

##### 雅楽源氏物語

(岐阜)

7月1日(日) 午後2時

3000円 18才未満 500円

こくふ交流センターさくらホール

管絃 盤涉調音取 青海波 越天楽 残楽 三返

舞樂 萬歳楽 納曾利 演奏 東京楽所

主催 高山市 高山市文化協会

問合せ TEL 0577-3416550

日本薬理学、国際薬理学、臨床薬理学

国際会議オーブニング舞楽 (京都)

十三 三管総論

第四十五 桃李花の吹止の説 (P489)

現代語訳 『楽家録』 (15)  
監修 東京学芸大学教授 遠藤 徹



7月1日(日) 午後7時 国立京都国際会館  
舞楽 蘭陵王 平安雅楽会

近江神宮燃水祭 (滋賀)

7月5日(木) 午前11時  
演目 白拍子  
出演 女人舞楽原笙会  
問合せ Tel.0797-23-1886

今昔雅楽集 七夕の宴 (茨城)

7月7日(土) 午後5時  
水戸芸術館コンサートホールATM  
3500円 1000円(ユース)  
芝祐靖復曲・構成 露台乱舞 芝祐靖復曲曹  
娘輝脱より 宮田まゆみ作曲 滄海  
武満徹作曲 秋庭歌 伶楽舎  
問合せ Tel.029-231-8000

星祭 師岡熊野神社 (神奈川)

7月8日(日) 午後7時  
管絃 黄鐘調 音取 西王楽  
舞楽 登天楽 抜頭 長慶子  
演奏 横濱雅楽会  
問合せ Tel.045-332-1532

第45回 雅楽セミナー (大阪)

天王寺楽所と日本三舞台  
住吉大社・巖島神社における天王寺舞楽  
7月11日(水) 午後6時半  
津村ホール(北御堂内) 往復はがきで申込み  
講演 小野真龍 天王寺舞楽協会常任理事・  
雅亮会講師

舞楽 還城楽  
演奏 天王寺楽所雅亮会(以和貴会)  
主催 雅亮会 以和貴会 朝日新聞社  
問合せTel./FAX06-6641-0084

西宮神社夏祭 (兵庫)

7月20日(金)  
午後7時半〜 8時半〜(2回)

舞楽 登天楽 還城楽  
出演 女人舞楽原笙会  
問合せ Tel.0797-23-1886

第10回伝統芸能の魅力 (東京)

大人ののための雅楽入門  
チケットプレゼント有り  
7月21日(土) 午前11時 国立劇場小劇場  
2500円(学生1800円)  
越天楽で知る雅楽 舞楽 胡飲酒  
10時より体験コーナーあり 出演 伶楽舎  
問合せ Tel.0570-07-9900

大人ののための声明入門 (東京)

チケットプレゼント有り  
7月21日(土) 午後2時 国立劇場小劇場  
2500円(学生1800円)  
声明に親しむ 鑑賞 天台声明  
出演 天台声明七聲会 真言宗豊山派僧侶  
浄土宗縁山流僧侶 日蓮宗僧侶  
茂手木潔子(進行)  
問合せ Tel.0570-07-9900

雅楽月見の宴 (千葉)

7月28日(土) 午後7時15分  
一宮海岸(前日、当日雨天の時 玉前神社  
に変更) 管絃 志越調 春鶯囀入破  
賀殿急 双調 鳥急 酒胡子 朗詠嘉辰  
演奏 玉前雅楽会  
問合せ Tel.0475-42-2711

子どものための雅楽コンサート2018  
〜雅楽つてなあに〜 伶楽舎 (東京)  
7月31日(火) 午後2時 子ども500円  
大人2000円(前売1500円)  
四谷区民ホール  
越天楽 舞楽 抜頭  
伊左治直脚本・作曲 踊れ! つくも神  
〜童子丸てんでこ舞いの巻〜

演奏 伶楽舎  
問合せ Tel.03-3200-9755

七夕の雅楽 (富山)

8月4日(土) 午後1時半 無料  
「雅楽の館」高岡市  
管絃 賀殿急 朗詠 二星 胡飲酒  
出演 洋遊会  
問合せ Tel.0766-64-0390

篝の舞楽 四天王寺 (大阪)

8月4日(土) 午後7時 入場料1千円  
四天王寺金堂前  
舞楽 振鈴・桃李花 林歌 還城楽 長慶子  
演奏 天王寺楽所  
問合せ Tel.06-6771-0066

御鎮座記念祭 雅楽の夕べ (宮城)

8月12日(日) 午後6時半 大崎八幡宮  
皇聲急 萬代の舞 其駒 青葉の舞他  
演奏 伶楽舎  
問合せ Tel.022-234-3606

雅楽の夕に、一緒に雅楽を (宮城)

〜東日本大震災復興祈念〜  
8月13日(月) 午後4時 大崎八幡宮  
演目 双調調子 瑞霞苑颯踏・急 林歌 越  
天楽 萬代の舞 浦安の舞 東野珠実作曲  
ききみみずきんより 演奏 伶楽舎  
問合せ Tel.022-234-3606

中元万燈籠 春日大社 直会殿 (奈良)  
8月14日(火) 午後6時30分ごろ  
舞楽 納曾利 演奏 南都楽所  
問合せ Tel.0742-22-7788

富岡八幡宮大祭奉納 (東京)

8月15日(水) 午後4時  
舞楽 胡蝶 陵王 納曾利(童舞)  
演奏 多度雅楽会  
春日山盆灯会 (福岡)

8月15日(水) 午後7時30分  
正行寺春日山雅楽御堂(福岡県春日市)  
曲目未定 演奏 筑紫楽所  
問合せ Tel.092-596-8585

港北芸術祭 雅楽〜世界最古のオーケストラ (神奈川)

9月1日(土) 午後3時  
港北公会堂(横浜) 2千円(一般前売)  
1千円(中学生以下) 当日500円増  
管絃 五常楽急 越天楽 陪臚  
舞楽 還城楽 宮田まゆみ作曲 滄海  
芝祐靖復曲 天平琵琶譜 番假崇  
芝祐靖作曲 舞風神 演奏 伶楽舎  
問合せ Tel.045-540-2239

石清水八幡宮 石清水祭 (京都)

9月15日(土)  
午前8時 放生会舞楽 胡蝶  
午前10時 蘭陵王 納曾利  
演奏 平安雅楽会  
問合せ Tel.075-981-3001

印融法印五百回忌法会・舞楽法会(神奈川)

9月17日(月・祝) 午後1時  
観護寺(横浜市緑区小山町)  
舞楽 迦陵頻 陪臚 蘭陵王 納曾利  
五常楽急 抜頭 演奏 神奈川雅楽部  
問合せ Tel.045-931-1714

秋季神楽祭 伊勢神宮 内宮神苑 (三重)  
9月22日(土)、23日(日)、24日(月)  
各午前11時  
舞楽 曲目未定  
問合せ Tel.0596-24-1111

三溪園 観月会 (神奈川)

9月22日(土) 午後6時半  
一部 祭祀舞 豊菜の舞 歌物 安名尊  
舞楽 登天楽



二部 管絃 黄鐘調 音取 越天楽 千秋楽  
舞楽 抜頭 納曾利 長慶子  
演奏 横浜雅楽会  
問合せ Tel 045-332-1532

春日山秋季彼岸会 (福岡)

9月23日(日) 午前10時  
正行寺春日山雅楽御堂(福岡県春日市)  
舞楽 曲目未定 演奏 筑紫楽所  
問合せ Tel 092-596-8585

つくりもんまつりの雅楽 (富山)

9月23日(日) 午後1時半 無料  
高岡市「雅楽の館」  
管絃 催馬楽 更衣 皇聲急 越天楽  
合歓塩 演奏 洋遊会

富岡八幡宮 雅楽の夕べ (神奈川)

9月23日(日) 午後7時  
管絃 黄鐘調 音取 西王楽  
舞楽 登天楽 抜頭 長慶子  
演奏 横浜雅楽会  
問合せ Tel 045-332-1532

仲秋管絃祭 日枝神社 (東京)

9月24日(月) 午後6時 3000円  
演目 平調音取 慶徳 春楊柳 神楽舞 他  
問合せ Tel 03-3581-2471

下鴨神社 名月祭 (京都)

9月24日(月) 午後6時  
舞楽 迦陵頻 青海波 抜頭 (予定)  
演奏 平安雅楽会

西宮神社観月祭 (兵庫)

9月24日(月) 午後6時  
曲目未定 舞 女人舞楽原笙会

伊勢神宮 観月会 (三重)

9月24日(月) 午後6時頃より  
外宮 勾玉池 舞楽 曲目未定

問合せ Tel 0596-24-1111  
住吉大社 観月祭奉納舞楽 (大阪)  
9月24日(月) 午後7時 無料  
住吉大社反橋上より 曲目未定  
出演 天王寺楽所  
問合せ Tel 06-6672-0753

太田豊雅楽リサイタルVol.1 (東京)

9月26日(水) 午後7時半  
日暮里サニールホールコンサートサロン  
前売り3500円 当日+500円  
催馬楽更衣 蘇合香序一帖 春鶯囀遊声  
舞楽 陵王二具 <客演> 安齋省吾  
予約・問合せ info@oayutaka.com

拾翠苑紅葉の舞楽 (富山)

9月29日(土) 午後3時 無料  
回遊式庭園「拾翠苑」(富山県砺波市頼成253)  
管絃 越天楽 更衣 合歓塩  
舞楽 蘇莫者(二具) 演奏 洋遊会  
問合せ Tel 0763-37-0371

「雅楽の夕べ」足立山妙見宮 (福岡)

9月30日(日) 午後3時  
場所 神楽殿 曲目 桃李花 陪臚  
演奏 関門雅楽会 舞 女人舞楽原笙会  
沙沙貴神社近江源氏祭 (滋賀)  
10月7日(日) 午前10時半  
曲目未定 舞 女人舞楽原笙会

今宮神社 秋の大祭 (京都)

10月8日(月) 午後7時 人長舞  
10月9日(火) 午前10時 東游  
演奏 平安雅楽会  
問合せ Tel 075-491-0082

中部日本雅楽連盟第68回演奏会 (名古屋)

10月10日(水) 午後6時半 無料  
名古屋市中芸術創造センター

管絃 太食調 合歓塩 ほか 舞楽 央宮楽  
登天楽 還城楽(右) 長慶子  
問合せ Tel 052-241-7784

元伊勢籠神社 眞名井神社舞楽 (京都)

10月15日(月) 午前10時半  
舞楽 蘭陵王(予定) 演奏 平安雅楽会  
問合せ Tel 075-491-0082

日向大神宮 例大祭 (京都)

10月16日(火) 外宮 午後2時  
10月17日(水) 内宮 午後2時  
御神楽 人長舞 演奏 平安雅楽会  
問合せ Tel 075-491-0082

野宮神社 斎宮行列 (大阪)


10月21日(日) 午後2時  
舞楽 蘭陵王 演奏 平安雅楽会  
問合せ Tel 075-491-0082

「経供養」四天王寺 (大阪)

10月22日(月) 午後1時より  
四天王寺太子殿前庭 曲目 未定  
出演 天王寺楽所  
問合せ Tel 06-6771-0066

★★読者チケットプレゼント★★  
☆大人のための雅楽入門 7月21日  
大人のための声明入門 7月21日  
国立劇場小劇場 各2名様ご招待  
7月7日必着 招待券を送付  
応募資格:「雅楽だより」定期購読者  
応募方法:はがきに希望の演奏会、住所、氏名、  
電話番号など必要事項を記入。  
応募先:〒188-0013  
東京都西東京市向台町6-12-6 鈴木方  
「雅楽だより」編集部

上牧の木村さん 市長にヨシを説明  
筆策のリードのヨシ  
を採取する上牧実行組  
合の木村和男さんが、  
濱田剛史高槻市長にヨ  
シを説明する動画が高  
槻市で製作されました。  
是非ご覧ください。  
高槻市ホームページ「高槻見聞録 豊かな  
自然と歴史が宿る町」  
「雅楽だより」  
購読・継続 申し込み方法  
購読料 一年(4回発行)二千円。  
郵便振込用紙に住所、氏名をご記入のうえ、  
「口座番号」0014005614032  
「加入者名」雅楽協議会  
までお振込みください。ご記入頂いた住所に  
「雅楽だより」を送らせて頂きます。



木村和男氏(左) 高槻市長(右)

雅楽の楽器・譜面 ほか  
(株) 武蔵野楽器  
〒114-0003 東京都北区豊島1-5-6  
電話 03-5902-7281  
Fax 03-5902-7282

「雅楽だより」第54号  
2018(平成30)年7月1日  
発行 雅楽協議会  
編集 雅楽協議会「雅楽だより」編集担当  
連絡先 〒188-0013  
東京都西東京市向台町6-12-6(鈴木治夫)  
TEL: 042-4551-8898  
FAX: 042-4511-8897  
メール gsgakudayori@yahoo.co.jp  
http://www.gsgaku-ryougaku.com/  
印刷 日本プロセス秀英堂株式会社